

# 〈呉越説話〉の形成 — 『太平記』への道のり—

程 國 興

はじめに

一連の〈呉越説話〉の中では、『太平記』巻四「備後三郎高德事付呉越軍事」がもっとも古態を存していると考えられている。これについて、増田欣は次のように指摘している。

日本における呉越説話の詳しい叙述は『太平記』から始まる。流布本『平治物語』にも比較的まとまった、比較的詳しい叙述が見られるけれども、これは『太平記』の文章を抄約したものである。『平治物語』の九条家本や金刀比羅本と『源平盛衰記』にもごく簡略的に記述された。

たしかに、『太平記』と仮名本『曾我物語』、『太平記』と『三國伝記』、『太平記』と御伽草子『呉越物語』とそれぞれに比較してみると、『太平記』のそれがもっとも古態であることがわかる(すでに別稿で述べた)。そして、『太平記』以前にまとまった形での〈呉越説話〉がみられないことから、現存の〈呉越説話〉群の中では『太平記』のそれを〈呉越説話〉の始原と位置づけることに無理はない。

しかし、〈呉越説話〉を、『太平記』作者が作ったものだと考えることはためらわれない。そう考えてしまうと、『太平記』に収められた中国説話は、すべて『太平記』作者が書いたものだという理屈に発展するのではないだろうか。

『太平記』以前の、たとえば鎌倉後期〜南北朝初期ごろに〈呉越説話〉の元となる説話(原態)があつて、それに多少の加筆修正等を加えつつ『太平記』が取り込んだという可能性はないのか、疑ってみる必要はないだろうか。原〈呉越説話〉は、散逸してしまっただけなのではないだろうか。

なお、原〈呉越説話〉が存在したと仮定して、それを鎌倉末期〜南北朝初期とここで措定したのは、別に述べるように、一二五二年成立の『十訓抄』の汚物嘗(しゅう)紙譚(し)が新態の〈石淋譚〉ではなく古態の〈飲尿譚〉だからである。『十訓抄』の〈飲尿譚〉が、当時一般に流布していた汚物嘗紙譚の様態を現したものだと思えることが許

キーワード：呉越説話、史記、呉越春秋、太平記

されるならば、『太平記』の直接の典拠となった原(呉越説話)は、『十訓抄』以降の成立となる。よって、原(呉越説話)の時代性は『十訓抄』以降、『太平記』以前ということ、鎌倉後期～南北朝初期という具体化が可能になる。

仮名本『曾我物語』巻五「呉越のたたかひの事」の冒頭に、越王勾践の父の名として「大帝」の名が出る。「史記」などを見ると、正しくは「允常」である。書体辞典類で見ると、「允」と「大」は酷似しているし、「常」と「帝」もよく似ている。「大帝」は、仮名本『曾我物語』の荒唐無稽な創作ではない。つまり、「大帝」は「允常」の誤写だと考えられるのである。この部分は『太平記』にはない仮名本『曾我物語』独自の部分なのである。そのようなところに、史実的に裏付けられそうな「大帝」＝「允常」が出てくるのである。つまり、仮名本『曾我物語』はあやふやな知識で増補するような荒唐無稽なテキストではないということである。すると、仮名本『曾我物語』の作者は、『太平記』だけを唯一の祖本と仰いでその絶対的な下位者の位置にいたのではなく、『太平記』とは別の(呉越説話)(現存しない)を参照していたということである。この事実のもつ意味は大きい。小稿では、『太平記』以前に原(呉越説話)が存在した可能性をさぐりつつ、その原話をもとにして『太平記』の段階で加筆修正されたとすればどの部分なのか、その可能性を考えてみたい。原(呉越説話)が残っていないため、現存の『太平記』(呉越説話)と比較検討することができない。そこで、別稿「日本の古典文学における呉越合戦関係の章句」<sup>5)</sup>で概観するような文学史的背

景、すなわち(呉越説話)以前の呉越合戦関係の章句との関わりを検討したり、もう一方で、『太平記』(呉越説話)の内部分析によって、矛盾や割れがないか検討したりして、段階的な形成の過程を経ているのかどうかを見極めたい。

## 第一節 構造の簡略化

### — 『史記』『呉越春秋』との比較から —

『太平記』は一気に全四〇巻が書き上げられたものではなく、段階的に成立したものであろうということは、もはや通説化している。第一部(巻十一まで)で、いったん成立したのである。(呉越説話)(巻四「備後三郎高德事付呉越軍事」)の含まれている巻四はその第一部に位置するので、『太平記』の中では比較的初期の段階で(呉越説話)も成立したと考えられる。その時期を、十四世紀半ばと考えると大過あるまい。問題は、『太平記』以前に、原(呉越説話)が存在したか否かである。『太平記』第一部の成立をそのように実体的に考えてみると、『史記』や『呉越春秋』から著しい隔たりのある、ほとんど創作と呼びうるほどの作為(改編や編集ではなく)を施して『太平記』作者が(呉越説話)を成立させ、自前の(呉越説話)を『太平記』第一部に取り込むことは、現実的には考えにくいのではないだろうか。正中・元弘の変という目の前に起こった争乱を書き留めようという衝動と、そのコンテキストに適合するように呉越の話を書き換えようとする指向とは、かなり異質なものであ

る。「太平記」以前に、原（吳越説話）があつて、それを一部改編しながら「太平記」に取り込んだと考へたほうが自然なのではないだろうか。また、後述する第二節、第三節の考察から、「太平記」の文脈に合うように改変された痕跡が見られる。つまり、「太平記」〈吳越説話〉の内部に亀裂があつて、重層的・段階的に成立した可能性が高いということである。ということは、改変される前の姿、すなわち原（吳越説話）が存在したということだろう。そのことを論証していくための前提として、まずは、「史記」や「吳越春秋」と「太平記」の〈吳越説話〉とが構造的にどれほど隔たつていゝかを、確認しておく必要があるだろう。

## 1 「史記」と「太平記」

まず、「史記」と「太平記」の関係について分析してみよう。「史記」は、紀元前九一年に成立した歴史書である。「史記」においては、吳王夫差と越王勾踐の話は、巻四一の「越王勾踐世家」を中心として巻三一「吳太伯世家」、巻六六「伍子胥列伝」、巻二二九「貨殖列伝」に散在している。これを、歴史上の年次に沿つて整理すると、次表のようになる。

一方、「史記」と「太平記」とで重ならないところは多い。後述するように、「史記」には西施が登場しないので、色に淫する吳王夫差像はない。伍子胥の憤死の理由が、「史記」では太宰嚭の諫言によるものだが、「太平記」では西施の処遇に絡んだものである。「史記」には〈三不可〉の話はないが、「太平記」にはある。「史記」

には戦争描写がないが、「太平記」は詳細である。「太平記」の大夫種は弱気の越王勾踐の自害を留め、太子王石与も登場するが、「史記」にはない。「史記」では大夫種が吳の陣に入つて太宰嚭と話す場面はないが、「太平記」にはある。つまり、「太平記」の太宰嚭のほうに敵方に内通して、その佞臣的性格が強化されている。「史記」では緒戦での敗戦後、范蠡は許されたために吳国に入つていないのに対して、「太平記」の范蠡は一年後に人質になつている。「史記」には范蠡の〈魚書〉の話はないが、「太平記」にはある。

全体的に見て、「史記」と「太平記」は、登場人物（吳国—夫差・伍子胥・太宰嚭、越国—勾踐・范蠡・大夫種）、場所（会稽）、枠組み（緒戦で負けた越が最後に勝つ）が同じであるだけで、他はほとんど重なるところがない。細かいところでは、わずかに大夫種が勾踐の自害を留めたこと（④）、伍子胥が自害してその両眼が東門に懸けられたこと（⑩）が共通しているだけである。もつとも異なるのは、「太平記」では展開の中軸となつて西施が「史記」には登場しないことである。また、兩國の最終決戦は「史記」では足かけ八年、少なくとも三度の戦いである（⑬⑭⑮）が、「太平記」では一度の戦いに整理されている。全体として、「史記」のほうが詳細・煩瑣であり、「太平記」は構造が簡略化されていると言える。

## 2 「吳越春秋」と「太平記」 — 西施への集中化 —

では次に、「吳越春秋」の内容を見てみよう。「吳越春秋」は、趙曄によつて、紀元一世紀前半ごろに編纂されたものである。「吳越

「史記」と「太平記」

「史記」の呉越合戦関係記事の内容	「史記」の箇所	「太平記」との異同
①勾踐、越王となる。(195BC)	卷41「越王勾踐世家」は無表記。それ以外のみ表記。	「太平記」との異同
②勾踐、闔閭(夫差の父)を滅ぼす。(闔閭(夫差の父)、姑蘇で勾踐に敗戦した後、病死。)(195BC)		「太平記」にはこの戦いの前に〈三不可〉があり、この戦いの戦闘描写もあるが、「史記」にはない。
③闔閭の子夫差、勾踐に勝利し、会稽山で勾踐を囲む。(194BC)	卷31「呉太伯世家・闔閭十九年」にもあり。	「太平記」には太子王石与が登場し、自書をとどめるなど詳細だが、「史記」にはない。ただし、種の諫言によって重器を焼こうとしてとどまったことは「史記」にも出ている。
④種の智略によって、勾踐が帰国。(194BC)	卷31「呉太伯世家・夫差元年」にもあり。	「太平記」にはこの「臥薪嘗胆」の故事がない。
⑤勾踐の反省(臥薪嘗胆)、范蠡が呉の人質となり、二年後帰国。		「太平記」では大夫「逢同」は登場しない。
⑥勾踐、呉に報復しようとする。(大夫「逢同」との対話)	卷31「呉太伯世家・夫差七年」、卷66「伍子胥列伝」にもあり。	「太平記」になし。
⑦呉王、斉国を攻める(伍子胥による阻止の諫言。)(185BC)	卷31「呉太伯世家・夫差七年」、卷66「伍子胥列伝」にもあり。	「太平記」になし。
⑧呉王、斉に勝つ。		「太平記」になし。
⑨勾踐、呉から粟を借りた翌年、粟を蒸して返却。蒸せば種として使えなくなり呉の国力が衰えるとの計略(伍子胥による阻止の諫言)。		「太平記」になし。
⑩太宰蹠、伍子胥を讒言。伍子胥に謀反の疑いありとして。		「太平記」になし。「太平記」には、「太平記」では、伍子胥が西施入内について呉王夫差に諫言。
⑪伍子胥が自害させられ、両眼を東門に懸ける。蹠が呉の政治をほしのままにする。	卷31「呉太伯世家・夫差十一年」、卷66「伍子胥列伝」にもあり。	「太平記」にあり。ほぼ同内容。

⑫ 呉王は諸侯と黄池で会盟。(479BC)	卷31「呉太伯世家・夫差十四年」、卷66「伍子胥列伝」にもあり。	『太平記』になし。
⑬ 勾踐、呉を討つ。呉王敗戦。	卷31「呉太伯世家・夫差十四年」、卷66「伍子胥列伝」にもあり。	
⑭ 四年後、再び呉を討つ。呉王二度目の敗戦。(475BC)		
⑮ 勾踐、呉を討つ。呉王、三度目の敗戦。	卷31「呉太伯世家・夫差二十年」にもあり。	
⑯ 呉王、三年間囲まれたのち滅亡。	卷31「呉太伯世家・夫差二十三年」、卷66「伍子胥列伝」にもあり。	『太平記』では右の三度の合戦を一度に整理。
⑰ 夫差の命乞い。自害。(473BC)	卷31「呉太伯世家・夫差十一年」にもあり。	『太平記』では処刑。
⑱ 范蠡、隠遁。	卷129「貨殖列伝」にもあり。	『太平記』では名利を捨ててのニュアンスだが、『史記』では暗殺から逃れるニュアンス。
⑲ 范蠡、商売をし、巨万の富を蓄積、陶朱公となる。	卷129「貨殖列伝」にもあり。	『太平記』にも類似の記述あり。
⑳ 范蠡の長男の話。		『太平記』になし。
㉑ 范蠡三度転居して富を人に施し、その名が天下に知られる。		『太平記』になし。

春秋」はもと十二巻から成っていたが、現存するのは十巻である。緒戦の越王勾踐と呉王夫差との戦い、そして越王勾踐が敗れて会稽山に囲まれた時の話が逸失部分に相当する。そのことに注意しつつ、『呉越春秋』と『太平記』を比較しなければならぬ。『呉越春秋』の現存十巻のうち、前半五巻が呉国の側から、後半五巻が越国の側から、それぞれ呉越の興亡を語ったものである。『太平記』の〈呉越説話〉よりも叙述範囲が広く、呉王夫差・越王勾踐以前の父

祖の時代から語られている。すなわち、『呉越春秋』の前半部(呉の歴史)、後半部(越の歴史)のそれぞれ一部分が『太平記』の〈呉越説話〉と重なることになる。次の表のとおりである。

対応せず	【太平記】と対応せず	【太平記】と対応せず	対応
<p>③ 伍子胥、王僚に仕える。</p> <p>② 楚の亡臣伍子胥が呉に入る。(伍子胥が楚国にいた時の話)</p> <p>① 王僚二年、公子光、王僚の命を受けて、楚を征伐、敗戦。</p>	<p>③ 王僚使公子光伝第三</p> <p>⑦ 余祭、十七年死ぬ。余昧が呉王となる。四年後死ぬ、その子、王僚が呉王の位につく。</p> <p>⑥ 諸樊が死ぬ。余祭が呉王の位につく。</p> <p>⑤ 諸樊が呉王の位につく。季札に位を譲るが、季札は受けず、「延陵季子」と封ぜられる。</p> <p>④ 寿夢二十五年、寿夢が病死、位を末子の季札に譲り、季札が受けず。</p> <p>③ 寿夢の四つの子の話。(諸樊、余祭、余昧、季札)</p> <p>② 呉楚戦争。(寿夢二年から十六年)</p> <p>① 寿夢元年、周から「礼楽」を、楚から「射御」を学ぶ。(呉の文明開化。)</p>	<p>⑥ 太伯から寿夢までの系譜</p> <p>⑤ 太伯、三度「天下を譲る」(寛甫が病死する前、太伯に国を三度譲り、太伯が受けず)</p> <p>④ 太伯、「荆蛮」で国を作り、その号を「呉」とする。</p> <p>③ 「太伯・仲雍」が「昌」(季歴の子)に国を譲り、「荆蛮」に赴く。</p> <p>② 古公寛甫(太伯の父)の徳(寛甫の三つの子、太伯、仲雍、季歴)</p> <p>① 呉太伯の先祖の伝説(姜嫄、后稷などの話)</p>	<p>【呉越春秋】の記事</p> <p>【呉太伯伝第一】</p>
対応していないため検討対象外	対応していないため検討対象外	対応していないため検討対象外	【太平記】との異同

『太平記』と対応	『太平記』と対応せず	対応せず
<p>⑤ 夫差十二年、夫差、斉を討ち、勝利して帰る。</p> <p>② 夫差十二年、越王など呉国に入る。重宝を以て太宰嚭に献ずる。</p> <p>③ 伍子胥、「越は腹心の病」と呉王に諫める。</p> <p>太宰嚭の讒言（伍子胥が殺される原因に）。</p> <p>⑤ 夫差十三年、子貢の計略によって呉王夫差が斉を討つことを決める。</p>	<p>④ 閻闔内伝第五</p> <p>① 閻闔元年、閻闔、伍子胥の政策に基き、国を治める。</p> <p>② 楚の亡臣「白喜」が呉に入り、伍子胥と共に閻闔に仕える。</p> <p>③ 閻闔二年、勇士「要離」の話。</p> <p>④ 閻闔三年、伍子胥、「孫子」を閻闔に薦める。（孫子が兵を治める。）</p> <p>⑤ 閻闔五年、越を討つ。檇里で越を破れる。</p> <p>⑥ 閻闔六年、楚と豫章で戦う。大勝。</p> <p>⑦ 閻闔九年、呉楚戦争。（伍子胥の復讐） （呉が伍子胥と孫武の謀によって、西の「楚」を破り、北の「斉、晋」を脅かし、南の越を征伐し、その覇権を確立。）</p> <p>⑧ 伍子胥の助けにより、夫差が太子となる。</p>	<p>④ 伍子胥、公子光の陰謀を知って、公子光に勇士「專諸」を勧める。</p> <p>⑤ 王僚八年、九年の呉楚戦争。</p> <p>⑥ 王僚十三年、公子光、伍子胥の計を使って、王僚を刺殺。（スペンサー本に見える。）</p> <p>⑦ 公子光、「呉王閻闔」となる。</p>
<p>「太平記」になし。</p> <p>「太平記」になし。</p> <p>下線部は「太平記」と対応せず。</p>	<p>対応していないため検討対象外</p>	<p>対応していないため検討対象外</p>

『太平記』と対応	⑦ 勾踐入臣外伝第七	⑥ 越王無余外伝第六	『太平記』と対応している
<p>① 勾踐五年、勾踐・大夫種・范蠡が群臣と離別。群臣の励ましの言葉。</p> <p>② 勾踐、呉に入つて、夫差を拜し、命乞いする。</p> <p>③ 伍子胥の反対の諫言。これにたいする太宰誦の諷言。呉王、勾踐を殺さず、宮中で「駕車養馬」の職を与える。</p> <p>④ 勾踐らは窮地に置かれていても「君臣の禮」「夫婦の儀」を失わない。</p> <p>⑤ 勾踐君臣の様子を見て、夫差に惻隱の心が生じる。</p>	<p>① 越王無余の先祖（堯、舜、禹）の伝説。</p> <p>② 元常（允常）の時、越が栄える。</p>		<p>⑥ 呉王夫差の夢。</p> <p>⑦ 公孫聖が夫差の夢を悪夢と占い諫めるが、太宰誦が良夢だと反論し、公孫聖は却つて呉王に誅される。</p> <p>⑧ 伍子胥の諫言と忠死。両眼が呉の東門に懸けられる。</p> <p>⑨ 夫差十四年、佞臣太宰誦が専制、呉の臣下皆諫めることを恐れる。</p> <p>⑩ 呉王夫差、斉を討つ。</p> <p>⑪ 越王が呉国を奇襲、太子「友」を破る。</p> <p>⑫ 夫差、斉軍を艾陵で破つて、晋と争期。</p> <p>⑬ 夫差二十年、越王が呉を討つ。呉軍が檣李で大敗。</p> <p>⑭ 夫差二十三年、越王再び呉を討つ。呉国が滅亡。</p> <p>⑮ 夫差が自害</p>
<p>④⑤ともに「太平記」になし。</p> <p>(参考)「(太宰誦)吾聞誅降殺服、禍及三世」は、「呉越軍談」冒頭の「臣古へを考ふるに、降人を誅すれば、禍三世に及ぶ」に近似。</p>	<p>対応していないため検討対象外</p>		<p>⑥⑦ともに「太平記」になし。</p> <p>西施絡みの諫言ではないところが「太平記」と異なる。</p> <p>「太平記」に近似。「史記」にはない。「(史記)には「呉は誦に政を任す」という語句あり。」</p> <p>「太平記」になし。</p> <p>⑪⑬⑭の三度の戦いを「太平記」では一度に整理。⑫も「太平記」になし。</p> <p>地下での伍子胥との再会が恥ずかしいので目を遮る。頭を下げて呉の東門を通るところは「太平記」のニュアンスと近似。</p>



『太平記』と対応している		『太平記』と対応している	
⑥ 勾踐九年、五大夫（扶同、范蠡、苦成、浩、句如）の諫言。		⑥ 伍子胥が「桀、紂」の先例をあげて、「越は呉の大患」と呉王に諫める。	⑥⑦の伍子胥と太宰嚭の衝突が激しい。「太平記」では薄められている。
④ 勾踐、「葛布」を呉王に献ずる。伍子胥の嘆息。		⑦ 伍子胥再び諫める。これに対して、太宰嚭が「斉桓、宋襄」の先例をあげて「越王を赦す」のを呉王に諫めて、反発する。	⑧⑨⑩は「史記」などにはなし。「糞」は「十訓抄」等では「尿」、「太平記」では「石淋」。
③ 臥薪嘗胆。		⑧ 呉王が病にかかって、三か月も治らず。	下線部のみ「太平記」に近似。
② 勾踐、国政を整う。		⑨ 范蠡が「呉王の糞を嘗める計」を勾踐に諫める。	表現は「太平記」と異なるが構図は近似。
① 勾踐七年、勾踐、焮国。		⑩ 勾踐が呉王の糞を嘗めて、呉王に治る期日を教える。	
		⑪ 病氣平癒を呉王夫妻が大いに悦び、酒宴を設けて群臣と祝う。勾踐も参加。	
		⑫ 伍子胥が「勾踐の計略に恐われないよう」と夫妻を諫める。夫妻が反論。	
		⑬ 勾踐、遂に焮国を許される。	
		⑧ 勾踐焮国外伝第八	
			「冬常抱氷、夏還握火」という表現は、国学院本『呉越物語』終盤の「斯くて、越王は本国に帰り、「如何にもして呉国を滅ぼさんと思召して、冬は氷を握り、夏は火を掴んで、自らその身を固め給ふ」という語句と近似。「史記」にはない。

対応	【太平記】と対応している									㉑ 勾踐陰謀外伝第九			
③ 勾踐十六年、越王勾踐、呉を討つ。太子を殺し、姑蘇台を焼く。	① 伍子胥が忠死、第七術が実現。	② 越王勾踐、民意を伺う。呉を討つ時期を待つ。	④ 大夫種、呉を滅ぼすための九術を進言。 一、尊天事鬼以求其福 二、重財幣以遺其君、多貨賄以喜其臣。 三、貴糶粟稿以虛其國、利所欲以疲其民。 四、遺美女以惑其心而亂其謀。 五、遺之巧工良材、使之起宮室以尽其財。 六、遺之諛臣、使之易伐。 七、驅其諫臣、使之自殺。 八、君王國富而備利器。 九、利甲兵以承其弊。	⑤ 勾踐十年、復讐について群臣と討論。	⑥ 第一術の実行として、「陵山、水澤」を祭る。	⑦ 第五術の実行として、「大工、木材」を献ずる。伍子胥が反対、夫差が伍子胥の諫めを聞かず、姑蘇台を作る。	⑧ 勾踐十一年、勾踐と計研の対話。	⑨ 勾踐十二年、第四術の実行として、「西施、鄭旦」を献ずる。伍子胥が「殷亡以妲己、周亡以褒姒」を挙げて諫める。	⑩ 勾踐十三年、第三術の実行として、呉から粟を借りる。これに対して伍子胥と太宰嚭の論争。呉王遂に越に粟を貸す。	⑪ 越が蒸した粟を呉に返す。呉王が種として使うも実らず呉国が飢饉に陥る。	⑫ 第九術の実行として、勾踐が剣戟、弓矢の術を学ぶ。	㉑ 勾踐伐呉外伝第十	傍線部は「太平記」になし。

『太平記』と対応している	
④ 勾踐二十一年、越王勾踐、申包胥、八大夫と「呉と開戦」についての討論。	
⑤ 越王勾踐、軍紀を正す。	
⑥ 越王勾踐、進軍の道に蛙を拝する。	「史記」になし。「太平記」にあり。「太平記」には帰国する途中に蛙を拝む。
⑦ 呉王が大敗。越に開まれる。(越軍、呉の南門で伍子胥の首と会う。)	「太平記」では呉王が東門を通る時に伍子胥の双眼と会う。
⑧ 一年後、呉王夫差、姑蘇山に上り、和睦を望む。遂に自殺する。	下線部は「太平記」になし。それほど時間が経過していない。「太平記」は処刑。
⑨ 越王覇業を遂げる。	「太平記」の最後にも類似する表現がある。
⑩ 范蠡が隠遁。	暗殺されそうになったための隠遁。「太平記」では名利を嫌って。
⑪ 勾踐、種を誅する。	「太平記」になし。
⑫ 勾踐の遺言。	「太平記」になし。
⑬ 勾踐以降の系譜。	「太平記」はごく簡略。

「史記」では四か所の「世家」「列伝」に分散していた呉越関係の歴史を、「呉越春秋」では一つにまとめている。「太平記」の〈呉越説話〉は、その「呉越春秋」の第五、七、八、九、十の五巻分に対応している。しかし、その五巻分に絞り込んで内容に踏み込んで「太平記」と比較してみても、なおかつ右のように大きく異なっている。呉越の最終決戦が「史記」では三度であったところは、「呉越春秋」でも三度となっていて、それらを「太平記」にみられるような日本のな〈呉越説話〉は、一度に集約していることがわかる。複雑なストーリーを整理して、簡略化しようという指向があるということだろう。そういう観点からみると、右に「太平記」になし」

と記した多くの部分は、存在しなくてもストーリーの展開に影響を与えないものばかりで、枝葉末節を省略して〈越王勾踐が雌伏の末に呉王夫差に逆転勝ちする〉という根幹部分に特化して再構成しようとしたものが、日本的な〈呉越説話〉であるといえるだろう。つまり、「呉越春秋」をさらに簡略化したものが、「太平記」の〈呉越説話〉ということである。その再構成の際にもっとも重要なのが、西施の扱いである。「呉越春秋」では、9②で種が越王勾踐に、呉を滅ぼすための「九術」を進言するが、美女(西施)を使って呉国を滅ぼす企み(九術の四番目)は、その中の一つでしかない。つまり、九分の一の比重でしかないのである。しかも、実際に西施が呉

国に送られるのは9⑥で、物語の展開の中では終盤の部分である。西施の存在が伍子胥の憤死に関わっているわけでもないし、呉国の滅亡の決定的な要因になっているわけでもなさそうである(他に、蒸粟の計略、姑蘇台への散財、伍子胥の憤死などの「要因」をちりばめていて、複合的な要因によって滅びたと読める)。すなわち、「呉越春秋」と「太平記」との構造的相違の要因を把握するために、西施の機能の分析をしなくてはならないのである。そのことは、第五節で述べる。

## 第二節 汚物嘗舐譚にみる

### 『太平記』系〈石淋ばなし〉の特異性

呉王夫差によって囚われの身となった越王勾践は、病気の呉王夫差の石淋(結石)を嘗める羽目になった。これを嘗めたことよって夫差の病気の治療方法がわかり、夫差の病氣平癒ののち勾践が越国に帰ることを許されたのである。注(3)の別稿で考察するように、汚物嘗舐譚には次の三種類のパターンがある。

糞を嘗める話：『呉越春秋』ほか。(『史記』にはない。)

尿を飲む話：『十訓抄』第七、『十訓抄』第八、金刀比羅本『平

治物語』下巻、仮名本『曾我物語』巻四、『源平

盛衰記』巻二、『源平盛衰記』巻十七、『国会本朗

詠注』

石淋(結石)を嘗める話：『太平記』、仮名本『曾我物語』巻五、

御伽草子『呉越物語』、『三国伝記』、古活字本『平治物語』下巻

〈糞を嘗める〉系統は、中国にしかない。日本で〈糞を嘗める〉話が忌避されたのは、越王勾践を美化する傾向が日本文学には強く、越王勾践の人物像に傷を付けまいとして〈糞を嘗める〉話を避けたからだろう(別稿)。日本では、〈尿を飲む〉系統と、〈石淋を嘗める〉系統の二系統あるということである。その二系統の内実をみてみると、右の傍線部のように〈石淋を嘗める〉系統のほとんどは、『太平記』の〈呉越説話〉の影響を強く受けたものに限られている。つまり、『太平記』によって〈呉越説話〉を引用したために、結果的に〈尿を飲む〉話ではなく〈石淋を嘗める〉話が選択されたものである。〈呉越説話〉以外で〈石淋を嘗める〉話を採用しているのは、古活字本『平治物語』のみだが、その古活字本『平治物語』も、『太平記』系にしかない范蠡の〈三不可〉を載せるなど明らかに『太平記』の影響を受けたものである。ということは、この論文で定義している〈呉越説話〉は、すべて〈石淋を嘗める〉系統の話ということになる。

ところが、もう一方の〈尿を飲む話〉は『十訓抄』、金刀比羅本『平治物語』、仮名本『曾我物語』巻四、『源平盛衰記』、『国会本朗詠注』と、大きな広がりをもっている。とくに注目されるのは、一二五二年成立の『十訓抄』に見える二か所とも〈尿を飲む〉話になっていることである。つまり、『太平記』より前から〈尿を飲む〉話が日本に存在したということである。そして、もうひとつ注目すべきこ

とは、「太平記」より後の「源平盛衰記」や「国会本朗詠注」でも〈尿を飲む〉話となつてゐることである。しかも、「平治物語」の中でも金刀比羅本は中世においてもつとも流布したとされているが、—文意は明瞭でないもの—それに〈尿を飲む〉系統の話が載せられてゐるのである。「十訓抄」から「源平盛衰記」「国会本朗詠注」への流れをみてみると、むしろ〈尿を飲む〉系統の話のほうが日本文学においては本流であり、〈石淋を嘗める〉系統の話は、「太平記」以下の〈呉越説話〉にのみ閉じられてゐるように見える。つまり、全体的な〈尿を飲む〉話の広がりの中で、〈石淋を嘗める〉話の流布は限定的といえるのではないだろうか。

もう一つ考えるべきことがある。話柄として、〈尿を飲む〉話と〈石淋を嘗める〉話の、どちらが古態といえるのか、という問題である。元となつた「呉越春秋」では〈糞を嘗める〉話である。その〈糞を嘗める〉行為はあまりにも印象が悪いので〈尿を飲む〉話に改変するということは、十分ありうることである。〈糞〉↓〈尿〉と変更することは、自然な連想といえるだろう。また、〈尿〉↓〈石淋〉（尿とともに排泄される結石）という改変も自然な連想だろう。ところが、〈糞を嘗める〉話をいきなり〈石淋を嘗める〉話と改変することは、連想上の飛躍を感じざるを得ない。

おそらく、「呉越春秋」が日本に入つてきてから、日本で〈糞を嘗める〉話が〈尿を飲む〉話に改変されたのだろう。日本化されたということである。そして、〈尿を飲む〉話に改変したとしても、汚物が帝王の体内に入るといふ悪印象は免れないので、それを〈石

淋を嘗める〉話に変更したのだろう。〈石淋〉ならば、嘗めたあと吐き出すことができ、口を濯ぐこともできる。実際に、—後世の解釈だが—スベンサー本「呉越物語」に、次のような話がある。

越王は、会稽山にて、呉王の首を実検し給ひて後、昔、石淋を嘗めたりしことの汚らはしさに、雪にて口を濯がれたり。さて

こそ、俗の言葉にも、「会稽の恥を雪むる」とは、申し伝へたり。「雪辱」という成語で、どうして「濯」ではなく「雪（すすぐ、そそぐ）」の字を用いるのかという理由説明に付会した話である。

さて、〈糞を嘗める〉↓〈尿を飲む〉↓〈石淋を嘗める〉という順で展開したとすると、日本において、〈尿を飲む〉（「十訓抄」）から〈石淋を嘗める〉（「太平記」）へと改変された契機は何だろうか。つまり、この話が「太平記」に取り込まれる際に「太平記」作者によつて改変されたのか、あるいは、「十訓抄」以降「太平記」以前のたとえは鎌倉末期・南北朝初期ごろにこの改変がなされたのか、ということである。

この改変は、「太平記」作者が行つたものだろうと私は考えている。この〈尿を飲む〉から〈石淋を嘗める〉への改変が、何のために行われたのか、その目的を考えてみると、間違いなく越王勾踐像に傷がつかないようにするためだろう。つまり、この改変は、越王勾踐像を美化しようとする人物によつてなされたものだと考えられる。「太平記」巻四「備後三郎高德事付呉越軍事」は、鎌倉幕府・六波羅探題を滅ぼそうとした後醍醐天皇の拳兵が失敗して隠岐に流される途中のこと、後醍醐天皇方の児島高德が美作の院庄で追いつ

き、後醍醐天皇が泊まっている宿の庭に桜の木があったのを削って、次のような詩句の一節を書き付けたことから語り始められている。

天、勾踐ヲ空シウスルコト莫カレ。時ニ范蠡無キニシモ非ズ。

(原漢文)

この文脈では、後醍醐天皇を越王勾踐に、名和長年を范蠡に、それぞれ準えようとしていることがわかる。隠岐に流された雌伏の後醍醐天皇と会稽山の緒戦で敗北した越王勾踐とを重ね、越王勾踐が最終的に呉を滅ぼして復権したのと同じように後醍醐天皇も都に戻って権力を回復するという見込み(願望)を語っている。ということは、(呉越説話)の越王勾踐が(尿を飲む)行為に出ると、それが後醍醐天皇の姿と重なってみえることになる。そのことは、(呉越説話)を引用する者として、絶対に避けなければならぬ。このように考えてみると、『太平記』作者には、(尿を飲む)話を(石淋を替める)話へと改変するにふさわしい必然性があったということである。先述のように、汚物嘗紙譚の中では(石淋を替める)話はむしろ異端であり、日本においても(尿を飲む)話のほうが伝承の本流であるように見える。そして、(石淋を替める)話で現存最古態のものが、『太平記』なのである。『太平記』作者が(尿を飲む)から(石淋を替める)への改変を行ったという証拠はないものの、その改変を行うにふさわしいのは、まず第一に『太平記』作者であるということと言える。その前後の文学史を概観してみても、越王勾踐像を美化する必要性を感じたのは、『太平記』作者以外には考

えにくいだろう。

### 第三節 〈三不可〉にみる「太平記」系范蠡像の特異性

注(4)の別稿で述べるように、范蠡(陶朱公)には二つの像がある。(隠遁者像)と(忠臣像)である。平安期の次の漢詩文集にみられる范蠡像は、ことごとく(隠遁者像)であった。

『菅家後集』(九〇三年成立)

『本朝麗藻』(二〇一〇年頃成立)

『和漢朗詠集』(二〇一八年頃成立)

『本朝文粹』(二〇五八年頃成立)

『江吏部集』(二〇七一年頃成立)

『江談抄』(二一〇四〇八年頃成立)

『本朝統文粹』(二一四一〜五五年頃成立か)

『本朝無題詩』(二一六二〜六四年頃成立)

『法性寺関白御集』(二〇九七〜一一六四年)

『資実長兼両卿百番詩合』(二三世紀初頭成立か)

この中での例外は、『本朝統文粹』にある「范蠡越国之賢相也」で、これが「賢相」たる范蠡像の唯一の例である。「本朝統文粹」だけで一〇例ある「范蠡」「陶朱公」の引用例の中でただ一つであり、右の一二作品全体でみれば「范蠡」「陶朱公」の全用例は一九例であるから(注4の別稿)、その中の一例にしか(忠臣像)がみられないのは、『太平記』の范蠡像を知る立場からすると、奇異にさえ

見える。

さらに、鎌倉期に入って、『海道記』の范蠡像も、「范蠡扁舟の泊り」と表現されていて、〈隠遁者像〉であるといえる。注（4）の別稿で引用するが、范蠡に関してまとまった分量の話を行っている能「舟弁慶」や「国会本朗詠注」には、〈忠臣像〉と〈隠遁者像〉の両方がみられる。そして、近世中期の『風来山人集』（一七六三年刊）でも、「范蠡が五湖にのがれ」と〈隠遁者像〉を捉えている。そして『雨月物語』（一七六八年成立）巻五「貧福論」の范蠡像も、「范蠡、子貢、白圭が徒、財を嚮き利を逐て、巨万の金をつみなす。」とあり、隠遁後の范蠡が富を蓄えたという話を引いている。この范蠡像も、〈忠臣像〉ではなく〈隠遁者像〉の系統のものである。こうして日本文学における范蠡像を概観してみると、汚物嘗舐譚の展開と同様に、『太平記』の〈呉越説話〉とその一類（仮名本「曾我物語」、御伽草子「呉越物語」、三國伝記）のことさら〈忠臣像〉を強調された范蠡像のほうに異端なのではないかという気さえしてくる。

そのことを前提として『太平記』の〈呉越説話〉を見直してみると、范蠡の〈忠臣像〉を際立たせているポイントがみえてくる。それは、呉王夫差を討とうとした越王勾践を、范蠡が諫めるといいうゆる〈三不可〉の有無である。味方の軍勢が少ないこと、時期が不適切であること、敵方に賢臣がいること、この三点を挙げて范蠡が勾践を諫めたところ、勾践はその三点にことごとく反論し、出陣を強行したのである。これが〈三不可〉である。結果として、この

緒戦（会稽山の戦い）で越王勾践は敗北したので、〈三不可〉は范蠡の賢臣ぶりが強調される話であるといえる。越王勾践像に傷が付くようにも見えるが、その後、越王勾践も反省し、成長することによって、最後の逆転勝利につながってゆく。

この〈三不可〉の話は、『太平記』の〈呉越説話〉の冒頭部に位置し、しかもかなりの叙述量が割かれている。岩波大系本の〈呉越説話〉が全二四二行で、そのうち三二行分が〈三不可〉に割かれているのである。じつに、八分の一にも及ぶほどの比重を占めている。ところが、この〈三不可〉の話は、『史記』はおろか『呉越春秋』にもまったく見られないのである。そればかりか、日本の『太平記』以前の古典にもまったく出てこない。ということは、先述の汚物嘗舐譚と同じく、〈三不可〉も『太平記』作者が創出した可能性が出てくる。名和長年と范蠡とを重ね合わせ、主君を支える賢臣・忠臣がいることをクローズアップする文脈で『太平記』巻四「備後三郎高德事付呉越軍事」すなわち〈呉越説話〉が位置づけられていることを考えると、もともとあった〈忠臣范蠡像〉を元にして、それを強調するために『太平記』作者が范蠡の〈三不可〉を創出した可能性は、十分に考えられる。

\* \* \*

先述のように〈呉越説話〉に入る直前、児島高德が、隠岐に流されそうな後醍醐天皇を励ますように、次のように詩の一節を書き付

けている。

天、勾踐ヲ空シウスルコト莫シ。時ニ、范蠡無キニシモ非ズ。  
 (原漢文)

これを受けて、「抑、此ノ詩ノ心ハ……」という書き出しによって「呉越説話」に入つてゆくのである。右の漢詩では、勾踐(主君)よりも范蠡(臣下)のほうが主役化しているといつてよい。帝王の浮沈は、臣下次第なのである。

『太平記』の「呉越説話」は、伍子胥や范蠡が前面に出てきている点、その中間に西施への対応の明暗を挟んでいる点など、話の内幕と導入部の漢詩とで指向が一致しているのである。このことを裏付けるように、『太平記』の「呉越説話」には「諫言」「諫め」という語が頻出してゐる。

范蠡、諫メ申シケルハ、「……

智深ウシテ人ヲナツケ、慮ヲ遠クシテ、主ヲ諫む。

……ト我ヲ諫ムベキヤ。

時ニ非スト我ヲ諫ムル。

君、范蠡ガ諫メラ用ヒ給ハザル故ニ非ズヤ。

……ト諫メ申シケレバ、越王、理ニ折レテ

伍子胥ト申ス者、呉王ヲ諫メテ申シケルハ

一度ハ泣キ、一度ハ諫メテ、理ヲ尽シテ申シケレバ

佞臣ハ阿ツテ諫メセズ。

伍子胥、之ヲ見テ呉王ヲ諫メテ申シケルハ

……ト言願ヲ侵シテ諫メ申シケレ共

忠臣諫メラ納ルレ共

余リニ諫メカネテ

争イ諫メテ節ニ死スルハ、是臣下ノ則也。

但シ、君王、臣ガ忠諫ヲ怒ツテ吾ニ死ヲ賜フ事

君、悪ヲ積メドモ、臣、敢ヘテ諫メラ献ゼズ

忠臣伍子胥ガ諫メニ依ツテ

こうしてみると、『太平記』の「呉越説話」は、范蠡の諫言を容れて最終的に勝利した越王勾踐と伍子胥の諫言を斥けて滅亡した呉王夫差との対照性を軸にして構成された物語であるといえるし、また、范蠡の諫言を斥けて緒戦で失敗した越王勾踐が後半は范蠡の諫言を受け入れて勝利するV字型構想を軸にして構成された物語であるともいえる。臣下による諫言の物語なのである。そしてそれが、『太平記』の文脈では、名和長年に対応しているのである。

#### 第四節 范蠡の〈魚書〉の存否にみる変容

越王勾踐が呉の国の捕虜となり、そこへ范蠡が訪問し、警護の番人に覚られないように魚の腹に手紙を入れ、その魚を牢の中に投げ入れた、というのが〈魚書〉の話である。〈魚書〉の話は『史記』と『呉越春秋』には出ていない。ただし、冒頭で述べたように、『呉越春秋』については、全十二巻のうち現存するのが十巻であるから、その逸失部分に〈魚書〉が含まれていた可能性は一応考えてみる必要がある。



まず、現存の『呉越春秋』の展開では、第七卷「勾踐入臣外伝」、第八卷「勾踐帰国外伝記」、第九卷「勾踐陰謀外伝」、第十卷「勾踐伐呉外伝」となっていて、少なくとも第七卷〜第十卷は連続性がある。第六卷は「越王無余外伝」という勾踐の先祖の話であるから、その後なら逸失した巻が存在した可能性はある。もちろん、そのような位置に、勾踐と范蠡のやりとりである〈魚書〉の話が存在した可能性はない。

次に、現存の巻の途中に〈魚書〉の話がかつて存在した可能性があるかどうか。第七卷が「勾踐入臣外伝」、第八卷が「勾踐帰国外伝」となっていて、もし〈魚書〉の話が存在したとすれば、第七卷の⑬「勾踐、遂に帰国を許される」（第二節の表を参照）以前の位置でなければならぬ。そして同巻の⑩が「勾踐が呉王の糞を嘗めて、呉王に治る期日を教える」であるので、〈魚書〉の話が存在したとすればこれ以前の位置ということになる。しかし、『呉越春秋』第七卷の前半は、呉の国の伍子胥と太宰嚭との確執が描かれていて、〈魚書〉の話が入る余地がない（それが入ると唐突になる）。しかも、第七卷の⑧で呉王夫差が病気になるのだが、⑨は「范蠡が〈呉王の糞を嘗める計〉を勾踐に諫める」なのである。〈魚書〉の話の主題は、范蠡が勾踐に、「どのような手段を使ってでも、とにかく生き延びてくください」というメッセージを伝えることである。その内容と、『呉越春秋』第七卷⑨の范蠡の諫言は、整合性がとれない。そもそも『呉越春秋』では、勾踐と范蠡は一緒に呉の国の捕虜となつていたので、二人が離れ離れであつてこそ成立する〈魚書〉の話とは相

容れない。

このようなことから、やはり『呉越春秋』には〈魚書〉の話は存在しなかったと結論づけざるをえない。ということは、〈魚書〉の話は、『史記』や『呉越春秋』には存在せず、おそらく日本に入ってきてからのどこかの段階で創作された可能性が高い。〈魚書〉の話が成り立つための前提がある。まず、越王勾踐と范蠡とが離れ離れになつていなければならぬ。勾踐が呉の国に捉えられ、范蠡が牢の外にいるという設定が前提になつている。一方、「どのような手段を使ってでも、とにかく生き延びてくください」というメッセージを范蠡が勾踐に伝えていたのであるから、勾踐が臥薪嘗胆（『太平記』系の〈呉越説話〉にはない）のような雌伏の時期にあり、いずれば牢を出て帰国を許されるという展開の前半部分に位置づけられてこそ成り立つ話であることがわかる。その臥薪嘗胆に相当するのが、『太平記』系の〈呉越説話〉では、石淋譚なのである。つまり、〈魚書〉↓石淋譚はセットになつているといえる。

ここで一つ問題がある。『史記』や『呉越春秋』には〈魚書〉の話は存在しなかったと述べたが、〈魚書〉の話に含まれている漢詩、西伯囚<sub>レ</sub>姜里<sub>一</sub>。重耳走<sub>レ</sub>翟。

皆以為<sub>レ</sub>王霸<sub>一</sub>。莫<sub>レ</sub>死許<sub>レ</sub>敵。

の出典らしきものが、『史記』にみえる。『史記』卷四一「越王勾踐世家」の、

文王（西伯）囚姜里、晋重耳奔翟。其卒王霸。

である。この前後の内容は、次のとおりである。

緒戦の会稽山の戦いで敗北したとき、越王勾踐は自分の破滅を覚悟した。そこで大夫種は、故事を語って聞かせた。湯王は夏に囚われ、文王（西伯）は姜婁に囚われ、晋の重耳は翟の地に待り、斉の小白は莒の地に待ったが、いずれも最終的には王としての覇権を握った。これらの先例から考えてみると、今この会稽山で囲まれたとしても、福に転ずることができないはずはありません、と。

【史記】では、問題の部分は次のように表現されている。

勾踐之困会稽也、喟然歎曰、「吾終於此乎。」種曰、「湯系夏台、文王囚姜婁、晋重耳待翟、斉小白待莒、其卒王霸。由是觀之、何遽不為福乎。」

である。このように内容的にはずいぶん異なる。【太平記】系の（呉越説話）では、「死を敵に許すことなかれ」の部分が一番重要なのだが、そこが【史記】の漢詩にはない。決定的な相違である。ゆえに、正確な意味での出典とはいえない。日本化された【太平記】系（呉越説話）の創作方法として注目しておきたい。この節では、（魚書）の話は【史記】や【呉越春秋】には存在せず、日本化された（呉越説話）の段階で入ってきたものであろうということと、（呉越説話）の中では石淋譚と結びついていることを指摘した。

## 第五節 呉王夫差像の二重性から

### —（呉越説話）の内部亀裂—

第二節では汚物嘗紙譚における、第三節では（三不可）にみえる、

それぞれ【太平記】系（呉越説話）の特異性を指摘してきた。これらを踏まえて、この節では、呉王夫差像を分析したい。

【太平記】以前に原（呉越説話）が存在したと考える根拠の一つは、【太平記】の（呉越説話）の呉王夫差像が二重化していることである。その一方は、毅然とした賢帝らしい姿であり、もう一方は淫欲にふける暗愚な姿である。【太平記】の（呉越説話）で、呉王夫差像が窺えるのは、次の九か所である。

- (1) 呉王夫差、是（勾踐が十万余騎を率いて襲来したこと）ヲ聞キテ、「小敵ヲバ欺クベカラズ」トテ、自ラ二十万騎ノ勢ヲ率シテ：（中略）：態ト敵ヲ計ラン為二三万余騎ヲ出シテ、十七万騎ヲバ陣ノ後ロノ山陰ニ深ク隠シテゾ置タリケル。
- (2) 又、彼ノ呉王夫差ノ行迹ヲ語ルヲ聞キシカバ、智浅ウシテ謀短ク、色ニ淫シテ道ニ暗シ。君臣共ニ何レモ欺クニ安キ所也。
- (3) （太宰嚭の進言を聞いて）呉王大ニ怒ツテ、「抑、呉ト越ト国ヲ争ヒ、兵ヲ擧ゲル今日ノミニ非ズ。然ルニ勾踐、運窮マツテ呉ノ擒トナレリ。是、天ノ予ニ与ヘタルニ非ズヤ。汝、是ヲ知リナガラ勾踐ガ命ヲ助ケント請フ。敢ヘテ忠烈之臣ニ非ズ」ト宣ヒケレバ
- (4) 呉王、即チ欲ニ耽ル心ヲ逞シクシテ、「サラバ早、会稽山ノ圍ミヲ解イテ勾踐ヲ助クベシ」ト宣ヒケル。
- (5) 呉王、猶心ユルシヤ無カリケン、「君子ハ刑人ニ近ヅカズ」トテ、勾踐ニ面ヲ見エ給ハズ。

- (6) 吳王、大キニ悦ンデ、「人、心有ツテ我が死ヲ助ク。我レ何ゾ是ヲ謝スル心無カラシヤ。」トテ、越王ヲ棲（牢か）ヨリ出シ奉ルノミニ非ズ。剩ヘ越ノ国ヲ返シ与ヘテ、「本国へ返リ去ルベシ。」トソ宣下セラレケル。
- (7) (吳から越への使者の發言)「我が君吳王大王、淫ヲ好ミ色ヲ重ンジ美人ヲ尋ネ給フ事、天下ニ普シ。
- (8) (越王勾踐への范蠡の進言)「臣、情ヲ計ルニ、吳王淫ヲ好ミ、色ニ迷フ事甚シ。西施、吳ノ後宮ニ入り給フ程ナラバ、吳王是ニ迷ヒテ政ヲ失ハン事、疑フ所ニ非ズ。
- (9) サレバ(西施が)一度宮中ニ入ツテ君王ノ傍ラニ侍リシヨリ、吳王ノ御心浮カレテ、夜ハ終夜、淫樂ヲノミ嗜ンデ、世ノ政ヲモ聞キタマハズ、昼ハ尽日、遊宴ヲノミ事トシテ、國ノ危キヲモ顧ミズ。…(中略)…淫乱日ヲ重ネテ更ニ止ム時無カリシカバ、上、荒ミ、下、廢ルレ共、佞臣ハ阿ツテ諫メセズ。吳王、万事醉ヒテ忘レタルガ如シ。
- 毅然とした賢帝らしい姿を見せているのは(1)(3)(5)(6)で、逆に淫欲にふける暗愚な姿を見せているのは(2)(4)(7)(8)(9)である。この両者の間には、人物像の割れが存在するといえるほどの、大きな開きがある。これは、〈吳越説話〉が段階的に形成されてきた痕跡ではないだろうか。つまり、二種類の吳王像のうち一方が原(吳越説話)のもので、もう一方は後次的に付与されたものではないだろうか。

## 第六節 〈勾踐帰国〉の理由の二重化、〈西施献呈〉の理由の三重化

吳王夫差像の二重性は、越王勾踐の帰国(以下、〈勾踐帰国〉と呼ぶ)の理由が二重化していることと、おそらく対応している。

緒戦の会稽山の戦いで敗北した越王勾踐は、殺されてもやむをえない状況であった。ところが、死罪を免れて吳の国の捕虜となった。その勾踐が、越の国へと帰国を許される際の理由が、二系統あるようなのだ。現在われわれが見ることのできる最古態の〈吳越説話〉である『太平記』のそれは、越王勾踐が吳王夫差の石淋を嘗めて吳王の病氣治癒の道筋を付けたから帰国できたのだと語っている。それが、右の(6)の引用文である。これについて、越王勾踐を越の國に帰国させるべきではないという伍子胥の諫言があったが、吳王夫差はそれを斥けて帰国させた。これが、〈勾踐帰国〉の理由の一系統目であり、現存の『太平記』(吳越説話)の表面的な文脈である。

この節の本題は、表面的には見えていない二系統目の帰国理由(痕跡)を探ることである。結論から先に言うと、勾踐が〈石淋〉を嘗めたことによつて助命され帰国できたという系統とは別に、西施を吳王夫差に献呈したことによつて助命され帰国できたという系統も存在したのではないかと考えるのである。

現存の『太平記』(吳越説話)では、越王勾踐が寵妃である西施を吳王夫差に差し出すのは、彼が無事に帰国を遂げてから後のこととなっている。『太平記』(吳越説話)では、〈西施献呈〉話は、次

のようなことから始まる。

斯カリケル処ニ呉国ヨリ使者来タレリ。越王驚イテ范蠡ヲ以ツテ事ノ子細ヲ問ヒ給フニ、使者答ヘテ日ハク、「我が君呉王大王、淫ヲ好ミ色ヲ重ンジ美人ヲ尋ネ給フ事、天下ニ普シ。而レ共、未ダ西施ガ如キ顔色ヲ見ズ。越王、会稽山ノ囲ミヲ出デシ時、一言ノ約有リ。早ク彼ノ西施ヲ呉ノ後宮ヘカシツキ入レ奉リ、后妃ノ位ニ備ヘン」トノ使ヒ也。

この「一言ノ約」とは、緒戦の会稽山の戦いで越王勾践が敗北し、呉王夫差の軍に包囲された際に、約束した言葉である。これは、越王勾践自身が約束したのではなく、その臣下である大夫種が次のように語ったものであった。

將軍（呉王夫差）、若シ勾踐ノ死ヲ救ヒ給ハバ、越ノ国ヲ呉王ニ獻ジテ湯沐ノ地ト成シ、其ノ重器ヲ將軍ニ奉リ、美人西施ヲ洒掃ノ妾タラシメ、一日ノ欲娛ニ備フベシ。

ここで、大夫種が越王勾践の〈助命〉と引き替えに差し出すことを約束したものは、

- ① 越の領土
- ② 越王の重器
- ③ 西施

であった。大夫種がこのような条件を独断で出すことができたのは、それ以前に、越王勾践と大夫種との間で、次のようなやりとりがあったからである。

（大夫種が越王勾践を……）ト諫メ申シケレバ、越王理ニ折レテ、

「敗軍ノ將ハ再ビ謀ラズ」ト云ヘリ。今ヨリ後ノ事ハ、併シナカラ大夫種ニ任スベシ。」ト宣ヒテ、重器ヲ焼カルル事ヲ止メ、太子ノ自害ヲモ止メラレケリ。

このように、大夫種は越王勾践からいわば全権委任を受けて、勾践の〈助命〉交渉にあつたのである。そして、さらにこの場面より遡ると、次のように大夫種は越王勾践に対して、どのような〈助命〉交渉をするのか、方針を示していた。

今、此ノ山（会稽山）ヲ囲ンデ一陣ヲ張ラシムル呉ノ上將軍太宰嚭ハ臣ガ古ノ朋友也。久シク相馴レテ彼ガ心ヲ察セシニ、是誠ニ血氣ノ勇者ナリト云ヘドモ、飽クマデ其ノ心ニ欲有ツテ、後ノ禍ヲ顧ミズ。又、彼ノ呉王夫差ノ行跡ヲ語ルヲ聞キシカバ、智浅クシテ謀短ク、色ニ淫シテ道ニ暗シ。君臣共ニ何レモ欺クニ安キ所也。

ここには、直接的な表現ではないものの、

- ① 敵方の太宰嚭に金品を贈つて内通させる。

- ② 夫差は美女に弱いので美女を送りこむ。

という方針が見えている。越王勾践は、これを聞いたうえで、先に引用したように、助命交渉を大夫種に全権委任したのであった。

このような流れからすると、西施を呉王夫差に贈ることは、越王勾践の〈助命〉か〈帰国〉と引き替えになるほどの大きな条件として提示されていることがわかる。この交渉の後、

越王已ニ降旗ヲ建テラレケレバ、会稽ノ囲ミヲ解イテ、呉ノ兵ハ呉ニ帰リ、越ノ兵ハ越ニ帰ル。

とあつて、一般の兵卒は帰国できたことがわかる。そして、越王自身は、自ら呉ノ下臣ト称シテ呉ノ軍門ニ降り給フ。と捕縛され、「テカゼシカセ 杻械」をはめられて、「土ノ棲(牢)」に入れられた。現存の『太平記』(呉越説話)では、このあと石淋譚へと移り、越王勾踐の功績によつて呉王夫差の病気が治癒して、その褒美として(帰国)を許されたのである。

このように展開を振り返つてみると、大夫種が越王勾踐の(助命)と引き替えに差し出すことを約束した「領土」「重器」「西施」は、そもそもが(助命)のための条件であつて(帰国)と引き替えになるものではなかつたことに気づく。「石淋」にしても「西施」にしても、現存の(呉越説話)では(助命)とは関わつていない。「石淋」は(帰国)に関わつてはいるが、「西施」はそれにさえ関わつていない。大夫種の言葉どおりに話が展開するとすれば、「西施」はもつと早い段階で登場してきてもよかつたはずだ。つまり、「西施」は、(助命)か(帰国)のどちらかに関わつていたのが、本来の姿ではないか。(助命)のための条件として「領土」を差し出すのは、通常のことだろう。また、越王勾踐が「太子王石与」を殺して「重器」を焼き払おうとしていたという前段階があるので、それを大夫種が留めたということは、焼き捨てるべき「重器」を焼かずに呉王夫差に差し出すという一連の流れに乗つているといえる。ところが、一方の「西施」は、大夫種の言葉の中でも浮いていて唐突なのである。すでに(帰国)している越王勾踐が、なぜ西施を呉王夫差に贈らねばならなかつたかという点、呉王の求めに応じて西施を差し出さ

ねば、呉が再び攻めてくるという危険性を范蠡が次のように語つたからであつた。

若シ今、西施ヲ惜シミ給ハバ、呉越ノ軍再ビ破レテ、呉王又兵ヲ発スベシ。去ル程ナラバ、越ノ国ヲ呉ニ併セラルルノミニ非ズ、西施ヲモ奪ハルベシ。社稷ヲモ傾ケラルベシ。臣、情ヲ計ルニ、呉王、淫ヲ好ミテ色ニ迷フ事甚ダシ。西施、呉ノ後宮ニ入り給フ程ナラバ、呉王、是ニ迷ヒテ政ヲ失ハン事、疑フ所ニ非ズ。国費ハ民背カン時ニ及ンデ、兵ヲ起シ呉ヲ攻メラルレバ、勝ツ事ヲ立処ニ得ツベシ。

この文脈を丁寧に読むと、二種類の指向に支えられていることがわかる。前半(傍線部分)は、西施を呉王に贈らなければ再び攻撃されるから贈るべしという防御的な意味合いで語っている。一方、後半(傍線部より後ろ)は、西施を呉王に贈れば呉国が内部崩壊してこちらから攻めやすくなるという攻撃的な意味合いで語っている。矛盾というのではないが、二種類の指向で支えられているのである。そして、後半の指向のほうは、『呉越春秋』の「九術」にも見られた攻撃的なものである。(西施献呈)ばなしの本来的な姿を留めているといえるのではないだろうか。整理すると、(西施献呈)までの経緯は、

①呉国を内部崩壊させるための攻撃的な術策(『呉越春秋』に通じる)

②会稽山で呉軍に囲まれて王の助命を願うために提示された条件(『太平記』の大夫種)

③停戦後再び呉から攻められないようにするための防衛的な方策  
 (『太平記』の范蠡)

の三種類の指向が混在しているように見える。これが、かりに地層のように成立時点の古い時期から積み重なって現在のような形にまで形成されてきたとすれば、『呉越春秋』との共通性を持つ①の指向がもっとも古いものであると言えるだろう。次に、切迫感や展開の必然性から見ると②の指向が中間的なものだろう。そして、③の指向のみが伍子胥の死と直結していると考えられ、伍子胥の死が『呉越春秋』では西施絡みではなかったということも合わせて考えれば、もっとも後次的な指向ということになるだろう。①や②で西施を献呈する場合、呉王夫差は初めから淫欲の強い人物として描かれる必要はないが、③の経緯で西施を献呈する場合は、呉王夫差が淫に耽る王でなければその効果が期待できない。すなわち、〈西施献呈〉の三種類の指向(矛盾や割れというほどではない)は、呉王夫差像の二重性と対応しているようなのである。そして、〈西施献呈〉の三種類の指向のうち②が、〈勾踐帰国〉の理由の一つと絡んでいるということである。

\* \* \*

先に分析した呉王像の二重性は、行き当たりばったり(場面主義)の結果もたらされたものではなく、プロットと対応していた。すなわち、西施に関わる場所では淫乱、暗愚であり、それ以外では、

毅然とした賢帝であった。そして、賢帝の呉王像と結びついているのが石淋譚であった。文学史的に見ても、石淋譚には前史としての飲尿譚(『十訓抄』など)があり、こちらのほうが古い。一方、西施に関わって淫乱に造型される呉王像のほうが後次的で、新しいものとみられる。その西施に関わる部分が、大夫種の言葉と、范蠡の言葉とで、〈西施献呈〉はなし投入の必然性が異なるのである。

かりに、『太平記』の〈呉越説話〉の前半での大夫種の諫言にあるように、会稽山に囲まれた時点で西施を呉王に差し出すことが実行されていたとしよう。呉王はすぐに西施に溺れることになる(そうしなければ西施は魅力のない女性ということになり、西施像に傷がつく)。西施に溺れた呉王がそこにいたならば、呉の国は内部崩壊する方向に展開が進んでしまうはずである。〈呉越説話〉において西施の投入が早すぎると、范蠡の〈魚書〉の話は存在意義をなくすし、石淋譚で勾踐が苦節を耐え忍んで最後の逆転勝ちに繋げるという自力救済的な展開とも相容れなくなる。伍子胥が死ねば、その後には呉国の滅亡に突き進むのである。しかも、西施投入は伍子胥の死と直結しているので、その登場は遅いほうがいい。巨視的に見て、石淋譚(飲尿譚)を軸として越王勾踐の努力によって自力救済的に逆転勝ちした系統と、西施の投入によって呉が内部崩壊的に自滅した系統と、原(呉越説話)には二系統あったのではないか。そして、范蠡の〈魚書〉は前者の石淋譚と連動していた可能性が高い。飲尿譚のイメージが悪い(越王勾踐像に傷が付く)ので、西施投入で淫乱な呉王が自滅するという話が発想され(この系統は文学史的

にみて前史がなく、『太平記』〈呉越説話〉の大夫種・范蠡の言葉がその痕跡)、もう一方で、『太平記』の後醍醐天皇に辛抱を求める文脈に合わせるには飲尿譚も魅力的であるという理由から(しかし恐れ多いので飲尿譚を石淋嘗めの話に変更)復活させて合成したのが、現存の『太平記』〈呉越説話〉ではないだろうか。そしてその最終段階(層)には、范蠡の(三不可)を入れて臣下の諫言と主君の辛抱で貫こうとしたのだろう。

### 第七節 『太平記』〈呉越説話〉における西施の中心性

第一節で検討したように、『史記』や『呉越春秋』と『太平記』の〈呉越説話〉との対応部分を比較してみると、越王勾践が最終的に逆転する枠組みや、伍子胥、太宰嚭、范蠡、大夫種などの臣下が登場する点は変わらないことがわかる。逆に、もともと大きく異なるのは、西施像とその機能である。『史記』にはそもそも西施が登場しないし、『呉越春秋』には西施は登場するものの勝敗を分ける決定的要因にはなっていない。ところが、『太平記』の〈呉越説話〉では、西施が大きなウエイトを占めている。この節では、そのことを指摘する。『太平記』の〈呉越説話〉の内容は、次のとおりである。

#### 『太平記』の〈呉越説話〉の内容

- ① 范蠡の諫言(三不可)
- ② 越王勾践、会稽山敗戦
- ③ 大夫種の智略

④ 范蠡の魚書

⑤ 越王勾践が帰国

⑥ 越王勾践、帰途蛙を拝す

⑦ 西施、呉国へ

⑧ 伍子胥の忠死

⑨ 呉王夫差、敗死

⑩ 范蠡、隠遁

このうち西施の名が出るのは、③⑦⑧⑨である。この四か所を、まず概観してみる。

③では、越の臣である大夫種が呉の臣である太宰嚭に、越王勾践の助命の条件として、

將軍、若シ勾践ノ死ヲ救ヒ給ハバ、越ノ国ヲ呉王ニ献ジテ湯沐ノ地ト成シ、其ノ重器ヲ將軍ニ奉リ、美人西施ヲ洒掃ノ妾タラシメ、一日ノ欲娛ニ備フベシ。

と語る。これを受けて、太宰嚭が呉王夫差を二度にわたって説得すると、呉王夫差は、

呉王、即チ欲ニ耽ル心ヲ逞シクシテ、「サラバ早、会稽山ノ囲ミヲ解キテ勾践ヲ助クベシ」ト宣ヒケル。

と西施の魅力に負けたと語られている。

⑦は西施が登場する中心部分で、次のように語り始められている。

越王ノ后ニ西施ト云フ美人座シケリ。容色世ニ勝レ揮媚類無カリシカバ、越王殊ニ寵愛甚シクシテ暫クモ側ヲ放レ給ハザリ

キ。越王、呉ニ捕レ給ヒシ程ハ其ノ難ヲ遁レンガ為ニ身ヲ側メテ隠居シ給ヒタリシガ、越王、帰リ給フ由ヲ聞キ給ヒテ則チ後宮ニ帰リ参リ玉フ。年ノ三年ヲ待チワビテ、堪ヘ又思ヒニ沈ミ玉ヒケル歎キノ程モ呈レテ、髮疎カニ膚消エタル御形、最モワリナクラウタケテ、梨花一枝、春ノ雨ニ綻ビ、喩ヘン方モ無カリケリ。

このあと、越王勾践と西施の離れがたい様子と、それを諫めて西施を呉へ送ろうとする范蠡の言葉が語られている。

⑧は、次のような西施の形容から始まる。

彼ノ西施ト申スハ、天下第一ノ美人也。妝成ツテ一度笑メバ百ノ媚ビ、君ガ眼ヲ迷ハシテ、漸ク池上ニ花無キ歎ト疑フ。艶閉ヂテ僅カニ見レバ千ノ態、人ノ心ヲ蕩シテ、忽チニ雲間ニ月ヲ失フ歎ト奇シマル。サレバ一度宮中ニ入ツテ君王ノ傍ラニ侍リシヨリ、呉王ノ御心浮カレテ、夜ハ終夜、淫楽ヲノミ嗜ミテ、世ノ政ヲモ聞キタマハズ、昼ハ尽日、遊宴ヲノミ事トシテ、国ノ危キヲモ顧ミズ。

呉王夫差のこの体たらくを見て、伍子胥が次のように諫言する。

君、今、西施ヲ淫シ給ヘル事、之(殷の紂王が王妃を愛し、周の幽王が褒似を愛して国を滅ぼした事)ニ過ギタリ。国ノ傾敗、速キニ非ズ。願ハクハ君、之ヲ止メ給ヘ。

この諫言が受け入れられなかった伍子胥は、宮殿・姑蘇台が荒廃することを予見し広言したり、青蛇の剣を持ち出して西施の首を刎ねることまで進言したりする。その結果、呉王夫差の逆鱗にふれて

誅され、その両眼が呉の東門の上に晒されることになったのである。

⑨は、呉越の最終決戦であるが、呉に伍子胥がいなくなったため、あっけなく越の勝利となる。范蠡が越軍二十万騎を率いて呉に侵攻し、

范蠡、先ヅ西施ヲ取り返シテ越王ノ宮ヘ帰シ入レ奉リ、姑蘇台ヲ焼キ払フ。

と西施を奪還している。

このように③⑦⑧⑨を概観してみると、⑦「西施、呉国へ」と⑧「伍子胥の忠死」が西施の話の中心で、その前後に③と⑨が付いた形になっていることがわかる。前節でみたように、「史記」には西施は登場せず、「呉越春秋」でも西施の比重は軽い。ところが、「太平記」の〈呉越説話〉では、西施の比重はとても重い。「太平記」の〈呉越説話〉における西施の機能は、次の五つに整理することができる。

- 1 太宰詔の佞臣性の強化 (③)
- 2 呉王夫差の淫乱性の強調 (③⑦⑧)
- 3 越王勾践の未練の強調 (⑦)
- 4 伍子胥の諫言する側面の強化 (⑦⑧)
- 5 伍子胥の死の契機とその余波 (⑧⑨)

このうち、5は物語展開の機能に関わるもので、それ以外の1、4は人物像に関わるものである。もちろん、5が特に重要である。

『史記』では、伍子胥は太宰詔に讒言されて殺されるのであり、「呉



越春秋」でも、伍子胥の忠死の要因は「九術」をめぐる路線対立ではない。ところが、「太平記」では、呉王が西施に溺れ、それを見た伍子胥が諫言し、逆に伍子胥が誅されて、そのために呉が亡びるといふように、呉国の滅亡の起点に西施が存在するのである。

そして、西施という美女がクローズアップされたからこそ、2の呉王夫差の淫乱性が強調されることになったのだし（先述のように呉王夫差の原像は淫乱ではなかった）、越王勾践も西施に対して強い未練執着を見せる人物像になったのだし、西施の入内を呉王夫差に勧めた太宰詔の内通者としての悪いイメージ、すなわち佞臣的性格も「史記」や「呉越春秋」以上に強められることになったのである。

西施を中心化した〈呉越説話〉へと再構成したことによって、この物語が最大の変容を遂げたことは間違いない。問題は、そのような西施中心の改変を行ったのが「太平記」作者なのか、「太平記」以前の原（呉越説話）の作者によるものなのか、ということである。

第二節、第三節で述べたように、原（呉越説話）が存在したと想定して、それを「太平記」作者が手を加えたと考えられるのは、「太平記」の文脈である後醍醐天皇と名和長年の構図に引き寄せられるようにならば修正ならば行う可能性があるということであった。しかし、それに比べると、西施を投入して中心化する作爲は、かなり質が異なる。後醍醐天皇が女性に溺れたという文脈が前後に存在するわけでもないのに、「太平記」作者が西施中心化の作爲を行う必然性は見えないのである。

#### おわりに

以上、分析してきたことを整理すると、次のようになる。

- 1 汚物嘗紙譚については、〈糞を嘗める〉↓〈尿を飲む〉↓〈石淋を嘗める〉と展開したと考えられる。
- 2 呉王夫差像については、〈毅然とした賢帝〉↓〈淫欲に耽る暗愚な王〉と変容ないしは重層化したとみられる。
- 3 西施については、〈登場せず〉↓〈九分の一の軽さ〉↓〈中心化〉と展開したみられる。
- 4 伍子胥と太宰詔の確執については、〈呉国の内部崩壊の主因〉↓〈いくつかの要因の中の一つ〉と変容したと考えられる（3の西施との関係で）。
- 5 伍子胥の死の要因については、〈太宰詔の讒言〉↓〈西施絡みの諫言〉と変化したとみられる。
- 6 范蠡については、〈三不可なし〉↓〈三不可あり〉と重さを増したと考えられる。
- 7 越王勾践が呉国の捕虜になるか否か、それに関わって范蠡の魚書の話があるか否かについては、〈范蠡が捕虜になり勾践は帰国〉↓〈勾践、范蠡ともに捕虜になる〉↓〈勾践のみ捕虜になり、范蠡が魚書でひそかに連絡を取る〉と展開したと考えられる。つまり、勾践の悲劇性（雌伏、臥薪嘗胆的な要素）を強調する方向に変容していったようである。
- 8 越国が呉国に勝利するまでの対戦は、〈三度〉↓〈一度〉と

整理されたと考えられる。  
 そして、「太平記」作者が最終的に行った作為を、後醍醐天皇や名和長年になぞらえるような改変だと仮定し、もう一方で、「史記」や「呉越軍談」に書かれていることはわかっているため、その中間的な様態を、日本的な原（呉越説話）だとすれば、次のように整理することができる。

	「史記」	「呉越春秋」	日本化された原（呉越説話） （推定）	「太平記」
後半の対戦回数	三回	三回	一回	一回
汚物 嘗詛譚	ナシ	糞を 嘗める	尿を 飲む	石淋を 嘗める
范蠡の 魚書	ナシ	ナシ	アリ	アリ
范蠡の 三不可	ナシ	ナシ	ナシ	アリ
伍子胥の 死の要因	太宰嚭と の確執	太宰嚭と の確執	西施絡み の諫言	西施絡み の諫言
呉王 夫差像	毅然、 勇猛	毅然、 勇猛	淫乱、 暗愚	淫乱、 暗愚
西施の比重	登場せず	登場するが 9分の1 （軽い）	中心的	中心的

簡略化の指向 ←

勾踐像美化の指向 ←

范蠡像巨大化の指向 {

西施中心化の指向 {

原（呉越説話）の想定部分が、一番の問題だろう。ただし、実際

の書物という形態に限定せず、この話の形成に関与した改作者たちの思考回路の部分まで含めての形成と考えれば、右の表のような経路をたどって「太平記」に至ったことは、ほぼ間違いないと考えられる。

謝辞

小稿は、北川茂治先生による日ごろの日本語、とくに日本の古語のご指導、ならびに野中哲照先生によるテキスト分析の助言等をいただいで成稿したものです。両先生に、厚く御礼申し上げます。

注

- (1) 小稿で用いるテキストは次のとおり。  
 「史記」：新釈漢文大系本  
 「呉越春秋」：上海商務印書館縮印明弘治刻本  
 「太平記」：日本古典文学大系本  
 いずれも、適宜漢字・仮名の表記を変えたり、句読点・会話記号等を改めたりしたところがある。
- (2) 増田欣一九七六の二四八ページ。
- (3) 程国興「仮名本『曾我物語』の〈呉越説話〉論―『太平記』との比較研究―」（鹿兒島国際大学大学院学術論集）第二集、鹿兒島国際大学大学院、二〇一、三。
- 程国興「御伽草子『呉越』論―『太平記』との比較研究―」（鹿兒島国際大学大学院学術論集）第三集、鹿兒島国際大学大学院、二〇一、二二。
- 程国興「スペンサー本『呉越物語』の位相」（『古典遺産』第六一号、古典遺産の会、二〇二、三）

- (4) 別に述べる予定の「日本の古典文学における吳越合戦関係の章句」は、鹿児島国際大学大学院国際文化研究科に提出の博士学位論文の第一章に掲載するものである。これを含めて、いずれは一書にまとめたことを考えている。
- (5) 注(4)に同じ。

### 文献

- 後藤丹治・釜田喜三郎(校注)(一九六〇) 日本古典文学大系三三『太平記』  
一―三 東京・岩波書店
- 吉田賢抗(一九七七) 新釈漢文大系八五『史記』五「世家・上」『吳太伯世家第一』 東京・明治書院
- 趙擘撰・徐天佑注(一九三七)『吳越春秋』 上海商務印書館・上海、  
(一九六五再刊) 縮印明弘治刻本 台湾商務印書館・台北
- 増田欣(一九七六)『太平記』の比較文学的研究 東京・角川書店